

ネギのハウス利用による春どり栽培法

加賀屋 博行・吉川 朝美

(秋田県農業試験場)

Cultivation Method of Welsh Onion for Spring Production in Plastic Greenhouse

Hiroyuki KAGAYA and Asami KIKAWA

(Akita Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

秋田県のネギの作付面積は、平成5年度485haとここ数年ほぼ横這いで、出荷は85%が9月下旬から12月中旬の秋冬どりに集中しており、夏どり10%、春どりはわずか5%にすぎず、面積拡大及び生産向上を図るための周年生産技術の確立が求められている。

ネギは土質をあまり選ばず、土壌適応性の幅も広く、その栽培技術は一般化されており、全県的に技術基盤がある。また、機械化が進みつつあり、省力生産と面積拡大が可能な作物と考えられ、より一層の生産拡大のため周年生産に関する試験を実施している。夏どり栽培については、「品種と育苗法」を前報で報告したが、本報では春どり栽培における作期と適品種について、1992、1993年度で得られた結果を報告する。

2 試験方法

- (1) 試験場所：農試圃場（細粒灰色低地土、育苗；露地、本畑；792㎡フェイロンハウス）
- (2) 供試品種：元蔵、東京夏黒2号、明彦、長悦、長宝、吉蔵
- (3) 播種期、定植期及び収穫期：1992年度；播種期6月4日、定植期9月17日、収穫期93年1月18日、3月11日、4月8日、1993年度；播種期7月5日、定植期9月22日、

収穫期94年4月14日

(4) 耕種概要：育苗；畝幅90cm、条間10cm、条播、施肥量(kg/a) 基肥N、P₂O₅、K₂O各1、苦土石灰10、ようりん5、堆肥100、本畑；畝幅90cm、株間3cm、施肥は前作残存養分利用(93年度作付け前EC：上層1.13、下層0.95 mS/cm、pH：上層7.4、下層7.0、94年度収穫後EC：0.65 mS/cm、pH：6.4)

3 試験結果及び考察

1992年度の定植苗の生育は、葉鞘径8.0~10.5mm、全長63~76cm、1本重22~30gであった。定植123日後の93年1月18日では全長80~90cm、葉鞘長35cm前後、1本重90~100gまで生育し、調製1本重が80~90gになり調製歩留りも80~90%と高かった(表1)。

その52日後の3月11日では、「明彦、元蔵」の1本重は増加したが、調製歩留りが1月と比べやや低くなっており、調製1本重が増加したのは「明彦」だけで、収量は「明彦」が最も多く285kg/aであった。4月に入ると供試3品種とも抽だいが見られ、4月8日の1本重は「元蔵、東京夏黒2号」の増加が著しく、「明彦」はやや停滞したが、未抽だい株収量は「元蔵、東京夏黒2号」が約300kg/aで、「明彦」は3月の収量とほぼ同じであった(表2)。

前年より播種期が1カ月遅い93年度は、94年4月に入り抽だいが始まったので4月14日に収穫、調査した。1本重

表1 ネギ生育(1993.1.18)

(1992)

品 種	全 長 (cm)	葉 数 (枚)	葉鞘長 (cm)	軟白長 (cm)	茎 径 (mm)	1本重 (g)	調製歩 留り(%)	調製1 本重(g)
元蔵	88.4	4.7	36.8	22.0	13.9	96.0	90.6	87.0
東京夏黒2号	81.4	5.2	34.6	22.0	13.5	92.0	88.0	81.0
明彦	84.6	5.0	35.8	22.0	14.0	99.0	80.8	80.0

表2 ネギ収穫調査

(1992)

収 穫 期 (年/月/日)	品 種	本数 (本/m)	1本 重(g)	抽だい 率(%)	調製歩 留り(%)	調製重 (kg/m)	全長 (cm)	葉鞘部 (cm)	軟白長 (cm)	太さ(cm)別割合(%)				収量 (kg/a)	
										≥2	2~1.5	1.5~1	<1		
93/3/11	元蔵	24.5	101	0	77.2	1.90	78	113	45	35	2.0	22.4	40.8	34.6	211
	東京夏黒2号	24.0	94	0	75.5	1.70	71	95	46	35	2.1	18.8	56.3	22.9	188
	明彦	23.0	120	0	76.7	2.57	92	97	42	34	3.4	29.3	41.4	22.3	285
93/4/8	元蔵	27.5	145	7.3	72.4	2.68	105	105	57	42	7.3	29.1	38.2	25.4	295
	東京夏黒2号	30.0	140	11.7	76.4	2.83	107	99	49	40	3.3	33.3	43.3	20.1	314
	明彦	27.0	124	3.7	80.6	2.60	100	106	55	39	1.9	27.8	51.9	18.4	289

注. 調製歩留り以降の項目は未抽だい株について調査

表3 ネギ収穫調査

(1993)

収穫期 (年/月/日)	品 種	本数 (本/m)	1本 重(g)	調製歩 留り(%)	調製重		全長 (cm)	葉鞘部 (cm)	軟白長 (cm)	太さ(cm)別割合(%)				収量 (kg/a)
					(kg/m)	(g/本)				≥2	2~1.5	1.5~1	<1	
94/4/14	元蔵	21.5	74	82.7	1.13	58	85	41	28	0	0	62.5	37.5	126
	東京夏黒2号	26.5	66	83.5	1.27	51	82	39	22	0	2.0	46.0	52.0	141
	明彦	26.0	104	79.2	1.64	75	84	44	27	0	22.7	45.5	31.8	182
	長悦	26.5	121	76.6	2.45	93	111	51	31	0	20.8	64.2	15.0	272
	長宝	29.0	116	78.6	2.14	89	96	46	27	2.1	14.6	66.7	16.6	238
	吉蔵	26.0	77	77.3	1.24	53	86	41	26	0	4.1	49.0	46.9	138

注. 調製歩留り以降の項目は未抽だい株について調査

は‘長悦, 長宝, 明彦’が100g以上で, 未抽だい株収量は‘長悦’が最も多く272kg/aで, 太さは‘長悦, 長宝’が比較的優れた(表3)。

図1にこの時の抽だいの発生状況を示した。4月14日には‘長悦’以外の5品種は抽だいが始まったが, ‘長悦’は約1カ月遅い5月9日でも抽だいの発生株割合が2.8%と少なく, 極めて抽だいの遅い品種特性が見られた。次に比較的抽だいの遅い品種は‘元蔵’であった。‘明彦’と‘長宝’は同じタイプ, ‘東京夏黒2号’と‘吉蔵’が同じタ

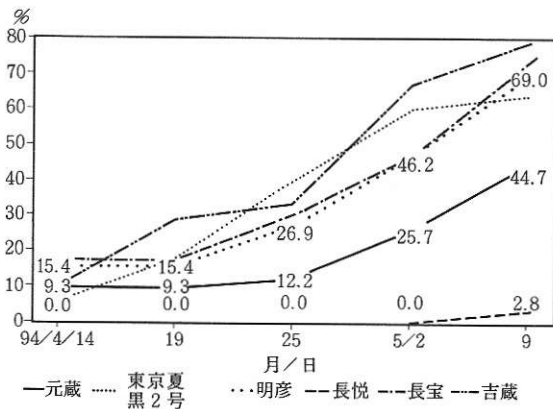


図1 抽だいの発生率 (1993)

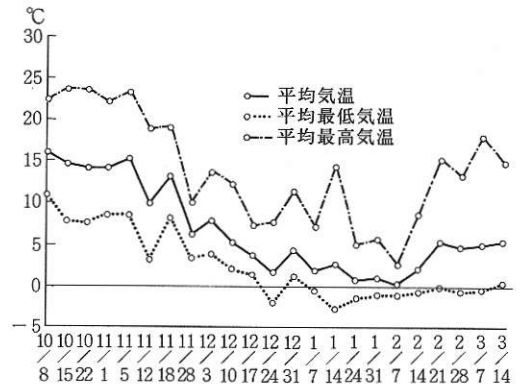


図2 ファイロンハウス温度経過 (1993)

たのは12月中旬から2月中旬までで, この温度条件では, 特別にハウス内の被覆がなくとも約300kg/aの収量が得られた。

4 まとめ

ネギの周年生産体系の一つとして, ハウス利用による春どり栽培法を確立した。前年6月上旬露地播種, 9月中旬ハウス定植により, 抽だい前の3月上旬には200~300kg/a, 抽だい極初期の4月上旬に約300kg/aの収量が得られた。また播種期が7月上旬, 定植期9月下旬では, 抽だい極初期の4月中旬に約300kg/aの収量が得られた。品種は3月上旬収穫では生育が旺盛な‘明彦’が, 4月収穫では抽だいの極めて遅い‘長悦’が生育, 収量, 品質が安定し適すると思われた。また, この作型は水稻育苗ハウスの前利用や野菜雨よけハウスの後利用として導入が可能で, 冬期間のハウスの有効利用が図られる。

イブに分類され, いずれも抽だいの発生が早い品種と見られた。

次に10月上旬から3月上旬までの温度経過を図2に示した。期間中の平均気温がマイナスに遭遇することなく, 凍害は見られなかった。平均気温が生育適温下限の15℃を下回ったのは11月中旬から, 軟白適温下限の5℃を下回っ